

土木広報大賞にみるインフラ広報の魅力と可能性

広報は人と人、人と地域を繋ぐ

社会や私たちの暮らしを支えるインフラは大切な存在であり、様々な恩恵と安心を与えてくれている。その姿は身近なものから通常目には触れないものまで多様であり、関わり方も人により異なるため、広報は重要な役割を担う。

縁あって、河川、道路、鉄道などインフラ広報の分野で、理解や共感の醸成、合意形成の観点から具体的な取組に参加してきた経験からも、広報によって生み出される価値と同時に難しさを承知している。その名の通り、広く報告をし続ける考えと姿勢から、広報は、人と人、人と地域を繋ぎ、関係者や賛同者を増やすことができる。理解者が増えれば、仕事はしやすくなり、疑問や課題について傾聴すれば、対話が生まれ、意識や見解の溝も埋まる。社会からの反響や手応えが届くことで、関係者が自信を持ち、結束力を高める効果も果たす。だからこそ、戦略的で持続的な広報が大切なのである。

しかしながら、事業の性質上、インフラが計画され、完成するまでには多くの時間を要するし、一般の消費財とは異なり、利用者、関係者も多方面に及ぶ。完成した時に、関わった方たちはすでに別の現場に移っていて、感謝の気持ちや賞賛の言葉は直接届かないこともあると想像する。送り手と受け手の間にタイムラグが生じるようだ。

2018年より始まった「土木広報大賞」(土木学会)は、日本全国の各地域で展開されている様々な広報のうち、土木の役割・意義・魅力について活動し、成果を上げている取組みやツール・メディア・企画等を顕彰する。近年重要度が増している防災・減災分野、インフラの維持管理・更新、環境保全分野などの内容も含むものとしている。コロナ禍で2020年は開催が見送られたものの、土木広報大賞2021には、日本全国から106件の応募が寄せられ、選考委員会による審査を経て、最優秀賞1件、優秀部門賞6件、準優秀部門賞11件、特別賞3件の合計21件が選出された。アイデア、工夫、地域特性、特徴、仕事への愛情と自負、社会に対する温かい眼差し、地域住民の方への貢献などが伺える、魅力的な内容が集積している。正確に、丁寧に「伝える」ことは当然のことだが、目指すのは「伝わる」かどうか。情報を受けた人たちの気持ちや行動が変わるかどうかだ。そのた



土木広報大賞2021表彰式より

学校法人先端教育機構 事業構想大学院大学 学長
株式会社 宣伝会議 取締役

た なか り さ
田 中 里 沙



めには、真面目で堅苦しい表現に留まらず、楽しく、時にユーモアを交えた提案が有効になる。

最優秀賞に選ばれた、四国防災八十八話普及・啓発研究会による、防災の教訓伝承 先人の知恵や工夫に学ぶ『四国防災八十八話マップ』は、四国各地で蓄積されてきた先人たちの知恵や教訓の継承と、必要な知識を連動させたツールである。質が高いだけでなく、それを地域の防災学習やツアー、勉強会に活用して、利用者の声をもとにPDCAを回して活動を進化させている点が高く評価された。産官学の各組織が連携をして、幅広い年齢層の一般の方々に、楽しい手法で効果的に働きかけ、成果を出している。

昨今、インフラといえば老朽化対策や今後のあり方が議論され、IT技術、ドローンの活用による検査やメンテナンスも進むが、山口県周南市の「紀寿橋梁生誕祭2020 in 周南 ~橋にねがいを」では、橋の100歳をお祝いするイベントが開催され、地域のために長年働いてくれた橋はたくさんの感謝の言葉で彩られ、心温まる風景が見られた。インフラを支える人と住民との絆が顕在化した形だ。

創出される未来の姿に目線を合わせる

広報において大切なのは、対象者を明確にして、その対象に向けて、最も適切なツール（媒体）で、効く表現を考え、最も良いタイミングで情報を発信することだ。土木広報対象で見られた手法は、最先端技術を使うものから、広報ツールの革新に挑むもの、丁寧な記録を極める表現、絵本、漫画、動画、クイズ、お菓子、漫才まで、アイデアのショーケースのよう。

また、広報の原点でもあるメディアリレーション、報道、記者会見における一步踏み込んだ情報提案など、コミュニケーションの最前線が揃う。災害報道は、報道機関にとっても大変その判断や発信のタイミングが難しいところ、九州災害情報研究会では、多機関連携の災害情報合同記者会見の仕組みを、全国に先駆けて構築し、実践している。

妥協を許さない仕事姿勢、地域・住民の安心安全を願う哲学など、インフラに関わる方々の自負は広報にも現れる。インフラが提供する価値、インフラによって創出される未来の社会の姿に目線を合わせ、情報を共有しながら共に進んでいく広報（パブリックリレーションズ）は、今後ますます重視され、全ての人の関与が期待されている。

【著者紹介】田中 里沙（たなか りさ）

1993年より広報・マーケティングの専門誌「宣伝会議」に参画し、取締役編集室長を経て2016年より現職。地方創生と新規事業の研究と人材育成を行う。社会資本整備審議会、中央環境審議会等委員。「クールビズ」ネーミング、土木広報大賞等の選考委員も務める。